

幼児の社会意識



和田昌子

(一)

先日、偶然に「大牟田の子ども達」というルポルタージュを、NHKの放送で聞く機会がありました。町をあげての長期間にわたる闘争の中で、子ども達は何を感じ何を考えたかという主題で、三池の緑ガ丘小学校五、六年の児童が、アナウンサーの問に対して、非常にハキハキと意見を述べていました。私達の耳には不慣れな「一万円生活」ということばも、彼らにとっては「宿題」ということばと同じ位明白であるようでした。「一万円生活長かったですよ、どうだった」というアナウンサーの問に対して「何でもかんでもギリギリだった。」「小遣は、言われる前に、使わんようにしていた。」「月に二五〇円もらって、いる時使うごとしていたが、使わんことになった。」「いい、子ども自ら「一年一年おとなになったことも関係あるだろうが、ストの気分に影響されたことある。」「辛棒せんでもよか

と言っても、やっぱり使わんことなる。」と理由までに考え及んでいました。争議が終了し、すでに就労している現在でも、争議の印象は、子ども達にとって非常に生々しいように感じられました。「忘れてろって言うけど、そう簡単に忘れられん。」「僕達も一しょに闘って来たでしょうが、だから今急に忘れろと言っても無理ではないか。」と言っていました。またこういう「闘い」の中で得た考えなのではないが、政府の退職者対策や社会保障についても辛らつな批判をしていました。しかしこれは、争議中のオルグや父親の話が消化されずに出ているだけのものようでした。特に、この闘争中に分かれた第一組合と第二組合との関係は、子ども達自身の生活に密接に連っているようでした。お互いに「会社も悪いが、第一組合も行きすぎだ。」「あまり長くなると生活が苦しくなるので、第二組合に入ったのだろうと思う、まちがったのかも思うが、やはりこの方がいい。」と、考え方からは自分達の父親の非も認めているようですが、

感情的な面、実際の行動の面では、父親達、母親達の対立はそのま
ま子ども達の対立になっているようでした。こういうことが、裏切
り者とはあそばぬ。ことになり、百二十名の他校への疎開を余儀な
くさせたことにもなったのでしょう。

はじめに長々と紹介しましたこのルボルタージュは、子どもの社
会意識の持ち方をはっきり示してくれていると思われます。勿論、
この社会意識は小学校高学年の子どものものですが、乳児が、いろ
いろな考え方に基いてそれぞれの態度を持っている人々の社会に入
っていくとき、どのようにしてこの子が、周囲の人々の考え方を自
分自身のものとして使用し、その人達と非常に似かよった態度を展
開するようになるかを考えようとする時、幼児の社会意識における
周囲の人々の影響を、より明確な姿で、私達に示してくれると考
えます。

(二)

はじめに、ここで使う社会意識ということばの意味をはっきりさ
せておきたいと思ひます。

社会心理学では、社会的態度を、ある物や事件に対して、その人
が比較的長期間変らずに持っているある強さの好意的または非好意
的方向づけと定義づけております。人は、多くの対象に対していろ
いろの態度を持ちますが、その対象を取り扱う見地はただ一つとい
うことはありません。十二、三才の少年には、自転車は、世界を探
険するための素晴らしい手段であるが、街で自動車を運転する者に

とっては、交通上の邪魔物にすぎないというように、同じ対象に対
してでも、考え方の相違によって、全く相反する態度がありえま
す。そして、ある人が持ついろいろなものに対する態度は、一つ
一つがバラバラにあるのではなく、その人の考え方の基調になるも
のにまとめられているでしょう。つまり、対象に対するある者の態
度は、常に彼の基調となっている考え方との関係で、その方向や強
さが決ってくると言えるわけです。この個人の基調となる考え
方を、態度がこれに基くという意味で「*基準枠 (Frame of reference)*」
と呼んでいます。

この基準枠は、態度形式の過程で、まず、その対象の知覚の仕
方に影響を与えます。人は、状況のあらゆる側面を注意し、知覚する
ことは出来ず、また知覚作用は、純粹に受動的なもの、「そこにある
ものを記録する」だけのものではないわけです。そこで、ある特徴
を省略し、他のそれを補足して、二、三の特徴にスポットを当て、他
のそれを従属させる過程——構成の過程によって、能動的にその状
況の対象を、選択して知覚するのです。そしてこの状況の知覚的構
成の仕方に主たる影響を与えるのが、個人の基調となっている考
え方、つまり基準枠であることが多くの研究で報告されています。即
ち、この基準枠は、ある対象に対する好意的・非好意的判断をする
ための情報を、限定して知覚させるという意味で、態度に影響を与
えるわけです。

この基準枠には、自分の以前の経験から来る個人的なものもあり
ます。例えば、幼児が弟に対して、自分から母親をいつも奪ってし

まう出ししゃばり者と思つてゐるような場合です。これに比べ、職業とか、階級とか、人種についての拠準桿は、しばしば広く共有されています。これについて、人種の態度の研究者であるホロヴィッツは「ニグロに対する態度は現在ではニグロとの直接的接触によつて決定されるのでなく、ニグロに対する世間一般の拠準桿に接触することによつて決定される。」と述べています。後者の共有されている拠準桿は他人と伝達を行なう場合、その基礎となる共通な理解を与えてくれるというわけで、実際に有用なものです。従つて、社会の成員として、他の人と共通な理解の基盤に立つて伝達をする為には、いろいろな共有の拠準桿を習得しなければならぬわけでしょう。ある拠準桿はその国の者全部に共有なものであるかも知れないし、他は、その地域社会という狭い範囲の者だけに共有なものであるかも知れません。

ここでは社会意識を、個人が社会の成員としての共有の拠準桿をもつて、周囲の人と同じ見地から、いろいろな対象を知覚することと定義づけたいと思つています。従つて、社会意識の拡大ということ、個人の共有の拠準桿を持つ範囲が広がった——今まで家庭という集団の拠準桿からだけしか考えられなかつたのが、他の集団、例えば、友人とか職場集団の拠準桿からも考えることが出来るようになる——ことを、また、同じ集団の拠準桿の質的增加——家族集団の中で、政治の事についても共通な理解をもつて会話に加わる——とが出来るといふようになる——も意味するでしょう。

(三)

子どもは如何にしてこのような社会意識をもつに至るか。社会意識を、自分の周囲の人達と共有の拠準桿で物事を判断することと定義すれば、この問題は、子どもはどういうふうにして共有の拠準桿を自分のものにするかということになるでしょう。この点について、社会心理学のニューカムは「子どもは単に自分の家族や社会にもっぱら行なわれてゐる態度を吸収するに過ぎないのではなく、他人の用いてゐる拠準桿を見て、自分もそれを使うようにするという能動的な見方が必要だ。つまり子どもは、拠準桿は実際に有用で、他人との伝達を行なう場合、その基礎となる共通の理解を与えてくれるものであることを知るのである。」と言つています。この、その集団に共有な拠準桿を自分のものにする仕方の代表的なものを三つあげてみましょう。

一、ある人々の間に共通な拠準桿があるようなとき、それに適當なことばのレッテルがつけられてゐることがあります。例えば、三池の子ども達はその意味をよく理解して、その立場から物事を考えていた「一万円生活」ということばもそれに当るでしょう。こういうことばを手がかりとして、新しい事件や事物に対する見方に導かれるというのが、第一の型です。例えば、子どもは、ある行為が「野卑な」とか「野蛮な」ということばで呼ばれてゐるのを聞き、その結果、経済的に恵まれてゐない集団に対して、軽蔑的な拠準桿をもつようになることがあります。つまり、子どもが成人や年上の子ども

の用いていることばを使って対象や人々の分類をし、その人達のもつ拠準枠を共有するに至るのでしよう。成人や年上の子どもとその対象に対して伝達し合う為には、彼らの拠準枠を自分のものにしななければならず、その為にはまず、その拠準枠のレットルを十分理解しないままに使うということでしょう。ハートリーの「子どもがどのようにして民族的拠準枠を用いるか」という研究で、この事はつきり出ています。三才六か月から十才六か月の子どもに「おまえは何か」「お父さんは何か」「お母さんは何か」という質問をしたところ、四才六か月以後、民族的反応をした者が六〇%以上になっていました。しかしことばの意味については、非常にあいまいな概念しか持っていないことが、他の質問への答で明らかとなっています。

二、始め、自分の以前の経験から個人的拠準枠をもっていて、これが集団の共有的なものとは合わない場合には、自分の個人的拠準枠をすてて、共有の拠準枠に従うようになるという方法で、周囲の人々と拠準枠を共有するに至る場合があります。子どもは身体の保護の場合と同じように、意味や理解についても成人に依存するわけです。ニューカムの研究では、幼児は自分の感覚的経験よりも成人の予見により多くの信頼をおくという結果が出ています。

三、子どもは、周囲の人々から、彼らの集団の拠準枠に基いて、画一的に新しい事物に導かれることが予想されます。ナイフは投げ槍の代りにすることが出来るでしょうが、誰もが切るためにしか使わなければ、ナイフは切るものと思うようになるでしょう。これは、子ども自身からは、自分の経験から得た拠準枠と考えられるもの

が、そのまま彼の属する集団の共有的拠準枠であるのでこのとり入れは、非常に自然な形で行なわれると言えるでしょう。

(四)

子どもが第一に共有的拠準枠をもつようになる集団は、家族です。子どもは宗教や政治などの問題に対して、両親と同じ態度を持つ傾向にあることは、二、三の研究から明らかにされています。これは子どもが、自分の家族の見地から事物を知覚することを習得しているから、つまり、家族の拠準枠に基いて画一的に与えられた経験から、それを自分の拠準枠として非常に自然な形でとり入れることを示します。

社会心理学者は家族集団を、非常に密接な交渉があるという意味での第一次集団の最も代表的なものとしてあげています。家族集団自身は宗派、階級などのより大きい集団に属していますので、家族集団で共有的な拠準枠は、ただ家庭の中の対象だけに止らず、広く文化や社会に対するものも含みます。従って家族は、子どもを保護し養育するだけでなくより大きい社会や文化の伝達者としての働きも持つわけです。三池の子どもたちの「ししょに闘う」とか第一組合と第二組合との間で、「お父さん達とは別で、友達同志仲良くせんといかんやろが、自分でもわからんがでじん」という子ども達の対立は、家族集団のこの使命を理解してはじめて説明出来ることです。子どもの健全で広い社会意識を育てるための家庭生活の重要性を痛感させられるところです。

(純心女子短期大学)